

産褥早期の褥婦の母性意識に 関与する因子について

国立公衆衛生院

新道 幸恵 (Sachie Shindo)

聖路加国際病院

松岡 恵 (Megumi Matsuoka)

聖路加看護大学

高木 廣文 (Hirofumi Takagi)

東海大学病院

稲尾 公子 (Kimiko Inao)

東海大学医学部

藤井 明和 (Akikazu Fujii)

産褥早期の褥婦の母性意識に 関与する因子について

国立公衆衛生院

新道 幸恵 (Sachie Shindo)

聖路加国際病院

松岡 恵 (Megumi Matsuoka)

聖路加看護大学

高木 廣文 (Hirofumi Takagi)

東海大学病院

稲尾 公子 (Kimiko Inao)

東海大学医学部

藤井 明和 (Akikazu Fujii)

I. 要 約

結婚平均年数 2.6 年、平均産褥 4.0 日である初産婦 217 名の母性意識に関する調査により、以下のよう母性意識に関与する因子を抽出し、対象特性による差を示すことができた。

1) 母性意識に肯定的に関与する因子

第 1 因子：子供への愛着因子

第 4 因子：夫・子供を生きがいとする因子

第 5 因子：夫への愛着因子

第 6 因子：授乳を喜びとする因子

第 7 因子：自己の母親への愛着因子

2) 母性意識に否定的に関与する因子

第 2 因子：未熟な性格因子

第 3 因子：分娩体験の否定的観念に関する因子

3) 褥婦の学歴の上昇とともに、第 1、第 4 因子の因子得点は低くなる。

4) 核家族の褥婦は拡大家族の褥婦よりも第 5 因子の因子得点が高い。

5) 夫の職業が専門職、販売業、管理職の場合、第 7 因子の因子得点が低い。

II. はじめに

母性意識¹⁾すなわち女性が子供に対してもつ特殊な意識は、女性の幼少時からの生育過程において形成され、妊娠・出産・育児体験によって一層発達す

るものであるといわれている。そこで我々は、母性意識に関与する因子についての調査を、成熟期未婚女性、妊婦、産褥早期の褥婦、産褥 1 ヶ月時の褥婦を対象に実施してきた。そのうち、成熟期未婚女性を対象にした調査結果は既に報告した。今回は、産褥早期の褥婦を対象に行なった母性意識調査の結果を報告する。

III. 対象と方法

対象は、東海大学病院（以下 A 病院と記す）聖路加国際病院（以下 B 病院と記す）で出産した産褥 3 日目から 7 日目までの初産婦 217 名である。

調査は質問紙を用いて行った。調査内容は子供への関心、夫や自分の母親への愛着、分娩に対する感想、自己観、母親との関わりを主とした生育歴、等である（表 3 参照）。各項目について「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」のうちから 1 つだけ選ばれることにした。なお、愛着という言葉の定義は小嶋²⁾の「ある人間と他の特定の人間との間に形成される愛情のきずな」によった。したがって、ここでは愛着という言葉で「ある人間と特定の人間との間の二方向の感情に基づいて形成されるある人間の他の人間に対する愛情」という意味で用いることにする。

分析方法は、単純集計の他に因子分析（バリマッ

クス法)を行い、母性意識に関する因子を抽出し、各因子得点の対象特性による差を検討した。主要な計算は、東京大学大型計算機センターのHITAC-M280Hを用い、統計処理は主にS.P.S.S.を用いた。

IV. 結 果

1) 対象の背景

調査対象はA病院85名、B病院132名であり、初産婦の結婚年数は平均2.6年、産褥日数は平均4.0日であった。

対象者の最終学歴は表1-1)に示したように、大学卒が最も多く31.6%であり、中学卒はわずか0.9%であった。職業の有無では、現在は職業のない者が72.6%を占めて、そのうち結婚時に退職した者が約30%であった(表1-2))。これらの対象者の背景には、A、B病院間に有意差は認められなかった。

表1. 対象の背景

1) 最終卒業学校	数	率
中学校	2	0.9
高等学校	56	26.4
各種学校	33	15.6
短期大学	51	24.1
大 学	67	31.6
大学院	3	1.1
2) 職業の有無	数	率
有	57	27.0
無	153	72.0
結婚後に退職	(66)	(31.3)
妊娠後に退職	(51)	(24.2)
その他	(36)	(17.1)
3) 家族構成	数	率
核家族	175	80.6

夫の職業では専門職が最も多く、A、B病院の総数でみると約30%を占めていた。また、A病院では専門職のものが多く、B病院では事務職、管理職が多く両者には有意差が認められた(表2)。

2) 因子分析の結果

因子分析により、各項目間の相関を分析することで表3に示したような7因子が抽出された。なお、7因子の累積寄与率は32.4%であった。

第1因子では、子供に関する項目が因子負荷量が高かった。すなわち「子供が好きである」、「子供と一緒にいることが楽しい」、「子供の世話が楽し

表2. 対象の背景(夫の職業)

	総 数	A 病院	B 病院
専門職	65 (30.4)	34 (40.5)	31 (23.8)
事務職	46 (21.5)	14 (16.7)	32 (24.6)
管理職	22 (10.3)	6 (7.1)	16 (12.3)
販売業	18 (8.4)	7 (8.3)	11 (8.5)
技術工等	25 (11.7)	16 (19.0)	9 (7.0)
その他	38 (17.6)	7 (8.3)	31 (23.9)

() 内は%

い」等が、0.70以上の因子負荷量をもっていた。その他に因子負荷量が0.30以上の項目としては「赤ちゃんと一緒にいたい」、「赤ちゃんを抱くのは疲れない」、「夫の世話が楽しい」、「子供が生きるはりあい」等であった。

第2因子では、性格に関する項目で因子負荷量が高かった。すなわち、あきっぽい性格、わがままな性格、忍耐強くない性格、等に関する項目の因子負荷量が0.60以上であった。また、因子負荷量が0.30以上の項目には、「皆にチャホヤされるのが好き」、「危険や困難にぶつかると尻込みする方である」、「他人の意見に左右されやすい」等であった。

第3因子では、お産に関する項目で因子負荷量が高かった。すなわち、「お産は思ったより苦しかった」、「お産の時、取り乱してしまった」、「上手にお産できなかった」等が、因子負荷量0.50以上であった。

第4因子では、幸福感や生きがいにに関する項目で、因子負荷量が高かった。すなわち「夫を生きるはりあいとしたい」、「私の幸せは夫しだい」、「子供を生きるはりあいとしたい」等で因子負荷量が0.68以上であった。また、「生活に不平や不満があってもがまんしてすごす」という項目の因子負荷量は0.65であった。

第5因子は、夫や、生活の満足度に関する項目の因子負荷量が高くなっていた。すなわち、「夫が心の支えになってくれている」、「夫がそばにいと安心する」という項目の因子負荷量が0.67以上であった。因子負荷量が0.30以上の項目には、「夫が私の相談相手であってほしい」、「生活に不平や不満があるとがまんしない」、「現在の自分に満足している」、「夫の身のまわりの世話が楽しい」、「夫が育児についての相談相手になってくれる」等であ

表3. 因子負荷量一覧

	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子	第六因子	第七因子
私は子供が好きである	0.7932	-0.0583	0.0776	0.0953	0.0347	0.0865	0.0227
子供と一緒にいると楽しい	0.7537	-0.0023	-0.0724	0.0185	0.1083	0.0929	-0.1379
子供の世話が楽しい	0.7075	-0.0214	-0.0233	0.1449	0.1482	-0.0696	0.1399
赤ちゃんと一緒にいたい	0.5439	-0.1278	0.0394	0.1233	0.0540	0.2823	0.0877
赤ちゃんを抱くのが疲れる	-0.3855	0.0862	0.0449	-0.0162	0.0203	-0.1333	0.2710
夫の世話が楽しい	0.3403	-0.2723	-0.0659	0.2500	0.3724	0.0868	0.0403
子供が生きるはりあい	0.3303	0.0038	0.0868	0.6804	-0.0083	0.1856	0.1650
私はあきっぽい性格である	-0.1814	0.7264	0.0629	0.0502	-0.1334	0.0323	0.0002
私は忍耐づよいほうである	-0.0938	-0.7055	-0.1551	0.1028	-0.0421	0.0278	0.0327
私は我がままな性格と思う	-0.0932	0.6285	0.1452	-0.0503	-0.0178	-0.0990	0.0866
ちやほやされるのが好き	-0.0979	0.4806	-0.1268	0.1018	0.0371	-0.0450	0.0562
危険や困難にしりごみする	0.0208	0.4682	-0.0956	0.0610	-0.0515	-0.0674	0.0100
他人の意見に左右される	0.0424	0.4660	-0.0046	0.2499	-0.0716	-0.0092	0.1586
お産は思ったより苦しい	-0.0772	0.0141	0.8840	0.0076	-0.0132	0.0594	0.0077
お産は思ったより楽だった	0.0318	-0.0058	-0.8719	-0.0275	0.0964	-0.0986	-0.0095
お産の時とりみだした	0.1164	0.2406	0.6180	0.0184	0.0789	-0.0641	0.1278
上手にお産できたと思う	-0.0829	-0.2543	-0.5483	0.0351	-0.0785	0.1581	0.0117
夫が生きるはりあい	0.1956	0.0033	0.0448	0.7681	0.0918	-0.0667	0.0341
私の幸せは夫次第である	-0.1349	0.0013	-0.1003	0.6984	0.1524	-0.0233	-0.0168
不平や不満に我慢する	0.1586	-0.2159	0.0147	0.3658	-0.4221	0.0736	0.0619
夫は心の支えになっている	0.2415	-0.1108	0.0887	0.0399	0.7427	-0.0461	0.0593
夫がそばにいと安心する	0.1237	-0.0243	-0.0652	0.1987	0.6730	-0.0002	0.0807
夫は相談相手でいて欲しい	0.0323	0.0420	-0.1047	0.1952	0.4393	0.0324	0.0917
現在の自分に満足している	0.0261	-0.1159	-0.0751	0.0914	0.3855	0.0798	-0.0973
夫は育児の相談相手である	0.1565	-0.0012	0.2414	-0.1488	0.3447	0.2156	-0.0673
赤ちゃんにお乳を吸われると嬉しい	0.1068	-0.0101	-0.0280	0.0864	0.0131	0.8180	-0.0106
赤ちゃんにお乳を吸われると痛くていやだ	-0.0928	0.0611	0.0752	0.0068	0.0011	-0.7423	-0.0059
赤ちゃんの顔を見ながら、お乳を吸わせる	-0.0255	-0.0328	0.0219	0.0445	-0.0560	0.5478	-0.0111
生声に気づかなかった	-0.2931	0.2076	-0.0084	0.1710	0.0335	-0.4242	0.1272
母親と一緒にいると楽しい	0.0939	0.0351	-0.0130	0.0300	0.0035	-0.0490	0.7420
私はお母さん子であった	0.0322	0.1953	0.0587	-0.0123	-0.0133	0.0748	0.7290
自分の母親のような母親になりたい	-0.1119	-0.1608	0.0388	0.1987	0.1341	-0.0849	0.6665

った。

第6因子は、授乳や生ぶ声に関する項目の因子負荷量が高くなっており、「赤ちゃんにお乳を吸われるとうれしい」が因子負荷量0.818と最も高かった。因子負荷量が0.42以上の項目は、「赤ちゃんの顔を見ながらお乳を吸わせる」、「赤ちゃんの最初の泣き声に気付いた」等であった。

第7因子は、自分の母親との関係に関する項目の因子負荷量が高く、「自分の母親一緒にいると楽しい」、「お母さん子であった」、「自分の母親のような母親になりたい」等で因子負荷量が0.66以上であった。

3) 分散分析の結果

因子分析の結果抽出された7因子の因子得点について、対象特性別の差を検討するために分散分析を行なった。その結果、学歴別では、第1因子と第4因子に、夫の職業別では、第7因子に、家族構成別では第5因子に有意差が認められた。

図1、2に示したように、学歴を、高校・中学卒、短大・各種学校卒、大学・大学院卒の3群別に各因子得点の平均値を比較すると、第1因子と第4因子で学歴の上昇とともに因子得点の平均値が低くなることが認められた。

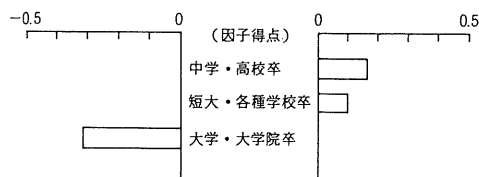


図1. 第1因子と学歴

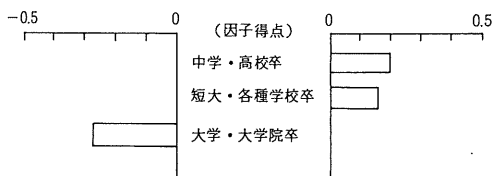


図2. 第4因子と学歴

図3に示したように、夫の職業を、事務職、専門職、管理職、販売業、生産業、その他に分類し、その各群について各因子得点の平均値を比較すると、

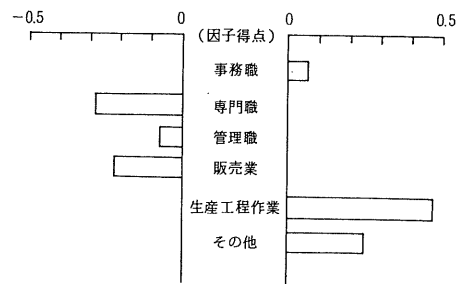


図3. 第7因子と夫の職業

第7因子において、専門職、販売業(自営業)、管理職の因子得点が低く、統計的にも有意差が認められた。

図4に示したように、家族構成を核家族と拡大家族に分類し、各群の各因子得点の平均値を比較すると、第5因子で核家族の方が拡大家族よりも因子得点が高いことが認められた。

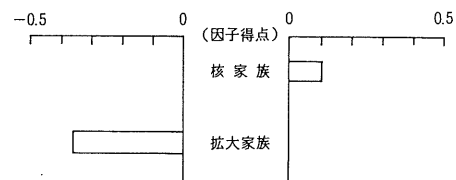


図4. 第5因子と家族構成

V. 考察

初産婦の産褥早期の母性意識に関与する因子についてのアンケート調査結果を因子分析し、7因子を抽出した。この結果について、1) 各因子の意味、2) 対象特性による各因子得点の差について、3) 各因子と母性意識の関係について考察を加える。

1) 各因子の意味

第1因子は子供への関心を示す項目で因子負荷量が高かった。このことから、母性意識の主因子³⁾であると考えられる。さらに、その子供への関心を示す項目の内容から、母親の子供を愛しみ、世話をすることが喜びであると同時に、子供の存在を喜び、支えとするものであると解釈できる。従って、第1因子は子供への愛着因子であると考えられる。

第2因子は、性格に関する項目で因子負荷量が高

かった。それらの各項目の内容をみると、あきっぱく、わがままで、自己顕示的で非主体的な性格に関するものである。従って、この第2因子は未熟な性格因子といえる。

第3因子は、お産に関する項目で因子負荷量が高かった。それらの項目の内容は、否定的な分娩時の経験、行動、態度を示すものである。従って、第3因子は分娩時の否定的観念に関する因子であると考えられる。

第4因子は、幸福感や生きがいに関する項目で因子負荷量が高かった。それらの項目の内容は、夫や子供を生きるはりあいとし、幸せは夫しだいであると考え、生活に不平や不満があってもがまんして過ごすというものである。従って、第4因子は、夫や子供を生きがいとする因子として意味づけられるだろう。

第5因子は、夫や生活の満足度に関する項目で因子負荷量が高かった。それらの項目の内容は、夫の世話への喜びと同時に、夫の存在や夫が相談相手になってくれることを支えとし、また喜びとするものである。すなわち、妻と夫間の二方向の愛情の結果としての妻の感情を示すものである。従って、第5因子は夫への愛着因子と考えられる。

第4因子と第5因子は、夫を生きがいとしたり、夫への愛着という点でやや似ているが、生活に不平や不満がある場合、がまんするか否かという点で顕著な違いがある。

第6因子は授乳や生ぶ声に関する項目で因子負荷量が高かった。それらの項目の内容は、児の出生時から児の存在を意識し、授乳を積極的に受けとめ喜びとするものである。従って、第6因子は授乳を喜びとする因子と考えられる。

第7因子は自分の母親との関係に関する項目で因子負荷量が高かった。それらの項目の内容は、母親の存在を喜びとする一方、母親との間に強い絆を実感した生育歴を有し、母親役割のモデルを自分の母親にしようとするものである。すなわち、自分の母親との間の二方向の感情を基にした母親への気持ちを示すものである。従って、第7因子は自己の母親への愛着因子と意味づけられる。

2) 対象特性による各因子得点の差について

第1因子、すなわち、子供への愛着因子の因子得

点は、学歴の高い母親ほど低い。このことは、学歴の高い母親は、子供に対する時に、子供の“存在”を受容し、その存在に反応するより前に、先ず「育児について考える」ことを優先するため、その結果として、子供への愛着が育ちにいくことを示すものと考えられる。

第4因子、すなわち、夫、子供を生きがいとする因子の因子得点は、学歴の高い母親ほど低い。これは、学歴が高いほど専門性を身につけている可能性が高く、夫と子供以外の生きがいを有している結果によるものと考えられる。

第5因子、すなわち夫への愛着因子の因子得点は、拡大家族よりも核家族に高い。この結果は、夫と妻の両者が、お互いが最も身近な頼り、頼られる相手で、世話し世話される相手であるという生活を送っているのは拡大家族よりも核家族に多いためと思われる。その結果、核家族の方が拡大家族の場合よりも夫への愛着因子が育ちやすいことを示すものと考えられる。

第7因子、すなわち自己の母親への愛着因子の因子得点は、専門職、販売業（自営業）、管理職の夫を持つ婦人は低い。この結果は、夫が職場で自立性の高い働きをしている場合、妻も各家庭で自立性の高い生活を送ることを要求されるようになり、必然的に妻の実家への依存性が少くなることによるものと考えられる。

3) 各因子と母性意識の関係について

母性意識は、平井⁴⁾が述べているように、母親が幼少時からの生育過程において家族との暖かな関係のもとで育つことによって形成されるものである。また、上田⁵⁾が指摘しているように、妊娠、出産の経験によって、さらに発展されるものである。これらのことを参考に、因子分析により抽出された7因子を母性意識という点から検討する。第1、4、5、6、7因子は母性意識に肯定的に関与する因子と考えられる。すでに考察したように、これらの因子は、第1因子は子供への愛着因子、第4因子は夫・子供を生きがいとする因子、第5因子は夫への愛着因子、第6因子は授乳を喜びとする因子、第7因子は自己の母親への愛着因子であると考えられる。従ってこれらの因子は生育過程や現在の生活において家族との暖かな関係を示す因子と考えられ、また育児体験

を肯定的に受けとめていることを示す因子と考えられるからである。

未熟な性格の者は、他者から注目され、受容された場合には相手との関係が形成されるが、相手からそれがなされなかったり、反対の応待がなされた場合には、相手との関係が形成されにくい。また、子供は必ずしも、自ら母親に積極的に働きかけない。母親の積極的な働きかけがあって初めて自らの反応を示す場合が多い。従って、未熟な性格の母親が、子供の消極的反応に出会った場合、「子供に対して特殊な感情」を持ち難い。これらのことから第2因子、つまり未熟な性格因子は母性意識に否定的に関与すると思われる。

ドイチェ⁶⁾は、「苦痛を精神組織中のさまざまな快楽体験の内に置く(略)」ことは、母性の貴重な構成要素であり、苦痛を克服できない場合には、子供との幸福な関係をつくり出すことは困難であると述べている。このことから、分娩体験の否定的観念は母性意識に否定的に関与するものと考えられる。従って、第7因子は、母性意識に否定的に関与する因子と考えられる。

謝 辞

調査に御協力下さいました初産婦の皆様、ならびに調査票の配布や回収に御協力下さいました東海大学病院、聖路加国際病院の産科病棟、外来の看護職員の皆様に感謝いたします。

「第25回日本母性衛生学会学術集会で発表した。」

引用文献

- 1) 松岡恵他：成熟期未婚女性の母性意識に関与する因子—私立看護大生へのアンケート調査の多変量解析—母性衛生，24(3,4合併号)，P. 221，1983.
- 2) 小嶋謙四郎：「アタッチメントの発達」保育のための乳幼児心理事典，P. 118～119，日本らいぶらり，1980.
- 3) 松岡恵他：再掲，P. 221.
- 4) 平井信義編：母性愛の研究，P. 56，同文書院，昭和56年，初版。
- 5) 上田礼子：母性意識の確立，周産期医学，11(9)，P. 1245，1981.
- 6) Deutsch, H.: 母親の心理，2. 生命の誕生，P. 176～180，日本教文社，昭和39年，初版。

参考文献

1. 柳井晴夫，高根芳雄：多変量解析法，P. 101～128，朝倉書店，昭和55年，初版。
2. 高木廣文：ナースのための統計学，医学書院，昭和59年，初版。
3. 大日向雅美：母親の子供に対する愛着—夫に対する愛着との関連性について，母性衛生，22(2)，P. 8～P. 15，1982.
4. NIE, N.H., et al: Statistical Package for the Social Sciences, McGraw-Hill, Inc., 1975. second edit.